

- 国際ファッション専門職大学: ファッションクリエイション学科
- 2023年卒業生: 浜名悠
- 留学先: イギリス
- 大学名: Central Saint Martins
- コース名: MA Fashion Womenswear (修士号/大学院)

第4回目校費留学レポート目次

- Kazna Askerさんによるレクチャー
- Bring to a Party to Party プロジェクト
- LFW / MA Fashion Show 2024
- Canada Goose プロジェクト
- ディスカッションの授業
- Pre-collection リサーチ

Kazna Asker さんによるレクチャー



Kazna Askerさんによる作品: <https://londonfashionweek.co.uk/designers/kazna-asker>

Bring to a Party to Party はMA Fashion Communication と MA Fashion によるファッションイベントを企画するコラボレーションプロジェクトです。

このプロジェクトのコミュニティ、ストーリーテリングのアプローチについて、一昨年MA Fashionを卒業したKazna Askerさんによるレクチャーがありました。彼女の作品はコミュニティ活動とアクティビズム、チャリティー活動とファッションを組み合わせたものです。イスラムの伝統的な衣服とUKのトラックスーツをミックスした作品が特徴的です。



Kazna Askerさんによる作品: <https://www.fashioncrossover-london.com/kazna-asker-design-process-i4506>

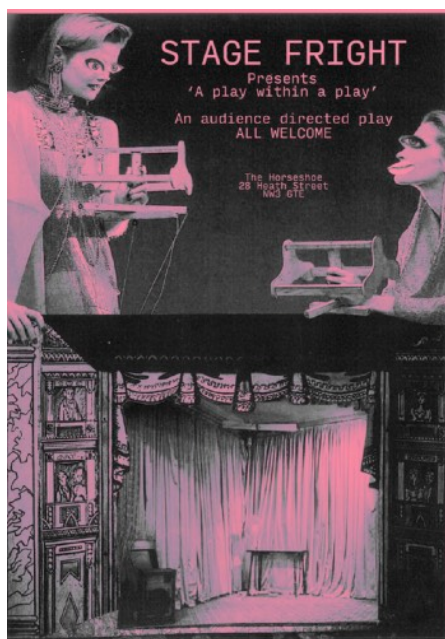
レクチャーの中で紹介された、印象的だった作品がこちらです。

彼女の地元のコミュニティに「何のために戦っているの？、あなたをインスパイアしてるのは誰？、あなたにとってコミュニティとは何を意味する？」といったポスターを作り、質問を尋ね、その答えがプリントされた衣服を彼女のMA Fashion 卒業コレクションで発表しました。このプロセスとストーリーテリングを聴いて私が考えていたファッションデザインとは全く異なるベクトルがあることに気づかされました。その他にもウェブサイトではなく消費者に直接販売をする方法や、販売する場所まで考えている彼女の活動を見て、ビジネスの面でも自分に沿った様々なやり方があることも学びました。

彼女のレクチャーを受けて、私はまだまだ自身のことについて掘り下げる時間が少ないのと、世界にプレゼンテーションするための私だけのストーリー、目的を具体的に構築する必要があると思いました。今回のプロジェクトのグループワークでは、私たちのファッションイベントをどのようなコミュニティにアプローチするべきか、考えるとても良い機会でした。

彼女は自分を含む大きなコミュニティを背負って、デザインに取り組んでいます。人のためのもづくりをする「デザイン」について深く考えさせられるレクチャーでした。

Bring a Party to Party Project



2. THE PALM TREE, 127 GROVE RD., BOW, LONDON E3 5BH
LIVE MUSIC DURING THE WEEKENDS



"Stage Fright" プレゼンテーションスライド

Kazna Askerさんのレクチャーを終えて約二週間ほどそしてグループで話し合いを行いました。Bring a Party to Party プロジェクトの私たちの最終的な成果物は "Stage Fright" というイベントになりました。これはパブという普遍的な場所に舞台を開放するコスプレイベントです。ファッションは集団的な信念体系であり、私たちの集団は、様々な意味での孤立の経験を共有することからStage Frightと名付けました。これは参入障壁のある閉じたシステムとしてのファッションに対抗するものであり、代わりにステージを開放する機会です。

これはMile End にある The Palm Tree というパブにて毎月開催されるイベントで、私たちがこの空間を作ることで参加者がコスチュームを着て、即興のパフォーマンスまたは脚本を通してのパフォーマンスをして、その可能性を探求する場でありファッションの探求の機会となっています。コスチュームは調達したものや寄付されたものを提供し、普段の生活では体験できない物理的なファンタジーを可能にするものにできるのではないかと私たちは考えました。個人は日常の生活体験とはかけ離れたキャラクターを体現して、探求する可能性を秘めているという私たちの想いがあります。

セットデザインは、コスト削減のため必要最小限のものを想定しています。またコスチュームは、廃棄物を減らして売れないものに新たな目的を与えるために、不要になった衣服（ロンドンの街角で見つけた衣服やチャリティーショップの衣服なども含む）や劇場のオブジェクトなども集めます。広告は、Instagram のリールから特定のパブやコミュニティの中心地にポスターの設置、TikTokなど多岐に渡ります。そして予算やスポンサーについて話し合いをした結果もプレゼンテーションでは報告しました。

自己表現であり、活動の自由、世界を見る手段としての文化であり世界を作り変える方法としての文化、着飾ることによるファッションの力、参加に制限やプレッシャーを感じず、個人が心地よいと感じる限りいくらでも参加できることに価値を置いたファッションイベントとなりました。

様々な国籍が集まった8人のメンバーでしたが、共通項を見つけ出し、イベントを作ることでの包括的なアプローチとディテールができていることから先生方からは高く評価していただきました。

SET DESIGN / LOCATIONS

AFFORDABLE LOCAL PUBS WITH A DIVERSE AGE-RANGE CLIENTELES
TO CUT COSTS MINIMAL SET-DESIGN REQUIRED

structural/ thematic film references:

'A play within a play':
Synecdoche New York (2008) - Kaufman
Birdman (2015) - Inarritu
La Belle Époque (2019) - Bedos
Stage Fright (1987) - Soavi
8 1/2 (1963) - Fellini

Set in one room:
Knocking (2021) - Kempff
The Bitter Tears of Petra von Kant (1972) - Fassbinder



- Collect from costume departments unwanted garments/ theater objects to give a new purpose for them. Also, use objects found on the streets of London or even charity shops garments.
- Reduce waste giving a new purpose for objects that are not sellable.
- Follows themes of fantasy imitating life, existentialism, dark realism, tragedy.
- WHY? Reduce waste giving a new purpose for objects that are not sellable



Objects and costume found on the street, car boot sale and CSM swap shop.

"Stage Fright" プレゼンテーションスライド

LFW / MA Fashion Show 2024



MA Fashion Show 2024 の会場風景

先月のレポートで記載したLFWに向けて作品制作に多くの時間を費やしていましたが、しかしながら主催者側による会場とのトラブルによって次回に機会に移行することになってしまいました。力を入れて準備をしていたのでとても残念でしたが、その代わりに同じ日に行われたMA Fashion 2年生の卒業コレクションのショーを観に行くことができました。会場はたくさんの業界の方々を訪れていましたが、席に座れるのはその方々と私たち一年生のMA Fashion、先生やチューターのみといったとても限られた人たちだけでした。私たちでさえしっかり名前のリストがあったので、改めてファッションショーはとても限られたイベントであることを認識しました。ショーの最中は服をじっくり観察することはもちろんなのですが、制作段階をある程度見ていることもあり、人々の反応も同時に観察していました。作品には背景があるものですがやはり、人々は大胆なパフォーマンス、シルエット、色遣いなどに食いつくので、作品を魅せる窓口としてここはしっかり意識したいと思いました。

Traiceline Prattさんの作品: <https://www.vogue.com/fashion-shows/fall-2024-ready-to-wear/central-saint-martins>

自分自身が印象的だったのはTraiceline Prattさんの作品で彼のシグネチャーであるファーのジャケットが際立っていました。しかし、ランウェイを「歩く」（＝人々が生活する）という点に着目すると、ボリュームのある服はその機能性について検討をしなければならないと思いました。なぜならあるモデルはファーの部分を抑えながら歩いており、一方で抑えないで歩いていたモデルの服はバウンスしていたからです。これが意図的なものなのかは、疑問に残りましたが、自分の作品にも通ずることのように思ったので観察していました。



Dhrub Bandilさんの作品: <https://www.vogue.com/fashion-shows/fall-2024-ready-to-wear/central-saint-martins>

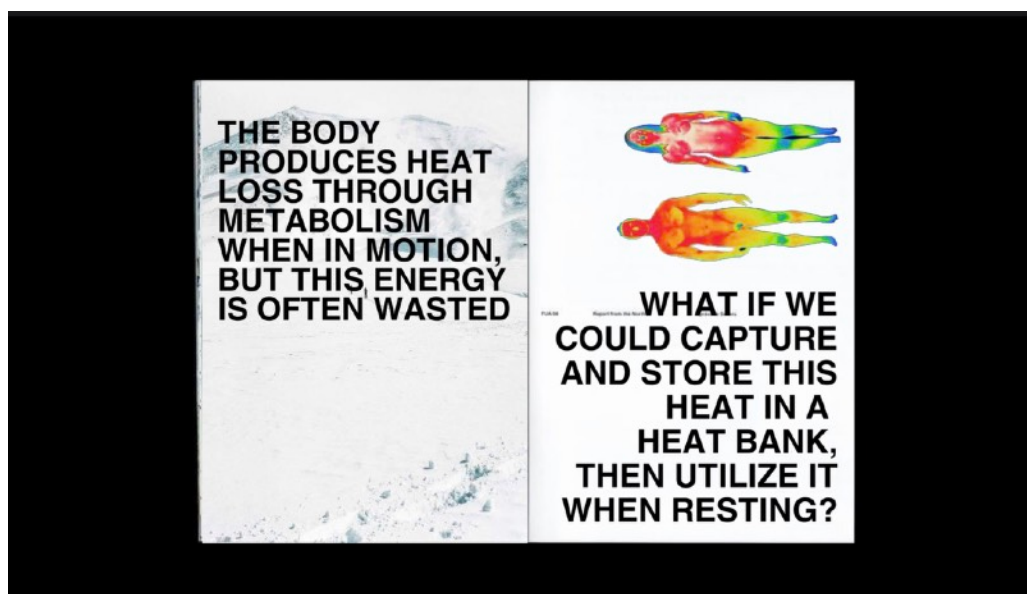
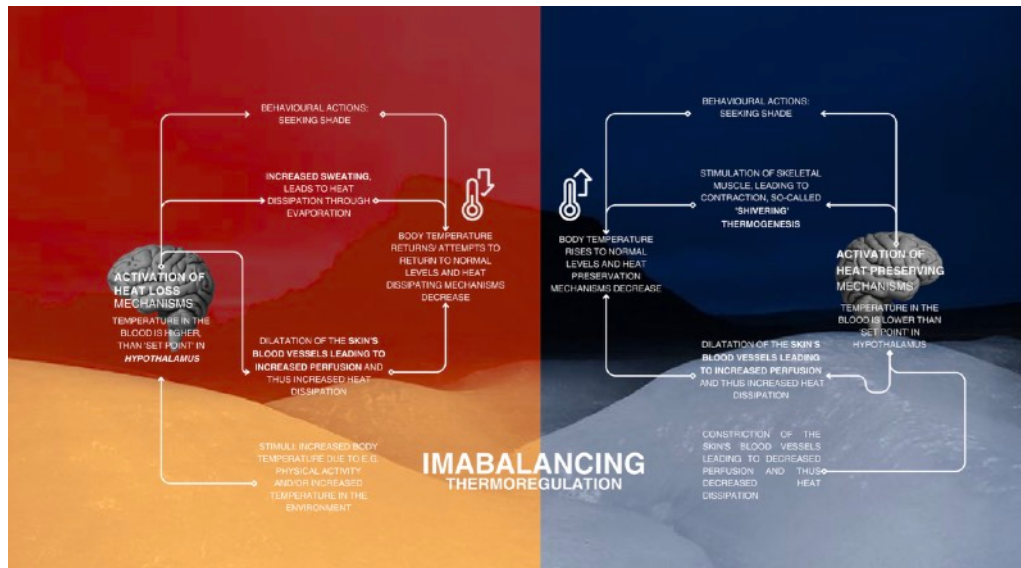
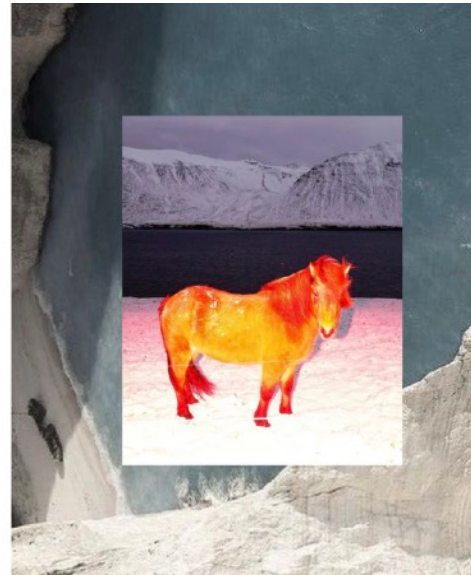
グランプリを受賞したのは、Dhrub Bandilさんの作品です。他の作品に比べてしっかりとしたアイデンティティと技術的な追求も見てとれました。伝統的な要素がありながらもポップに昇華している魅力的なLookでした。後日は2年生の展示会があったのであらためて彼の作品のディテールを観察しました。

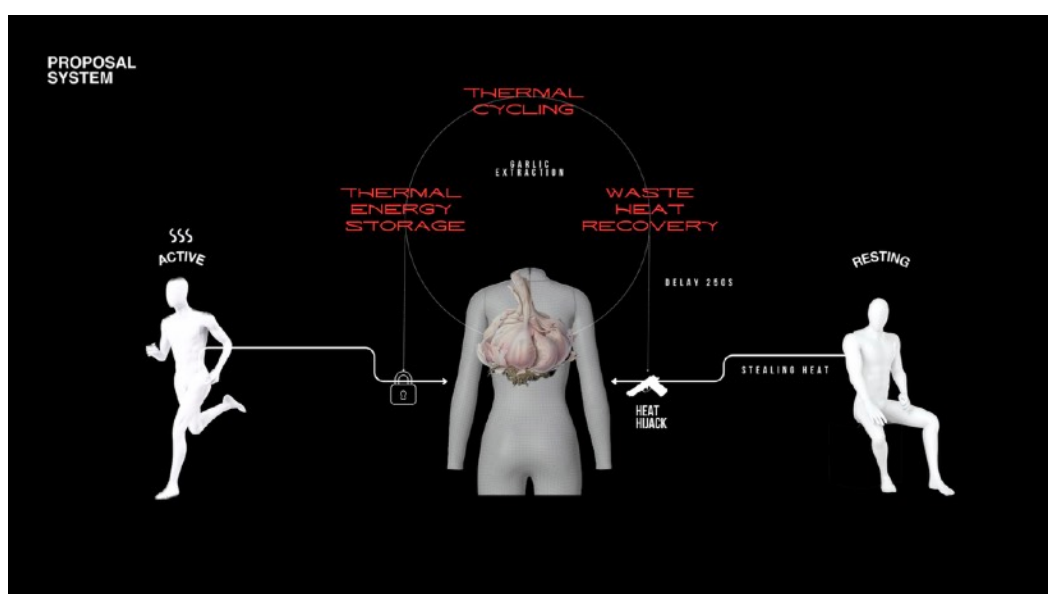
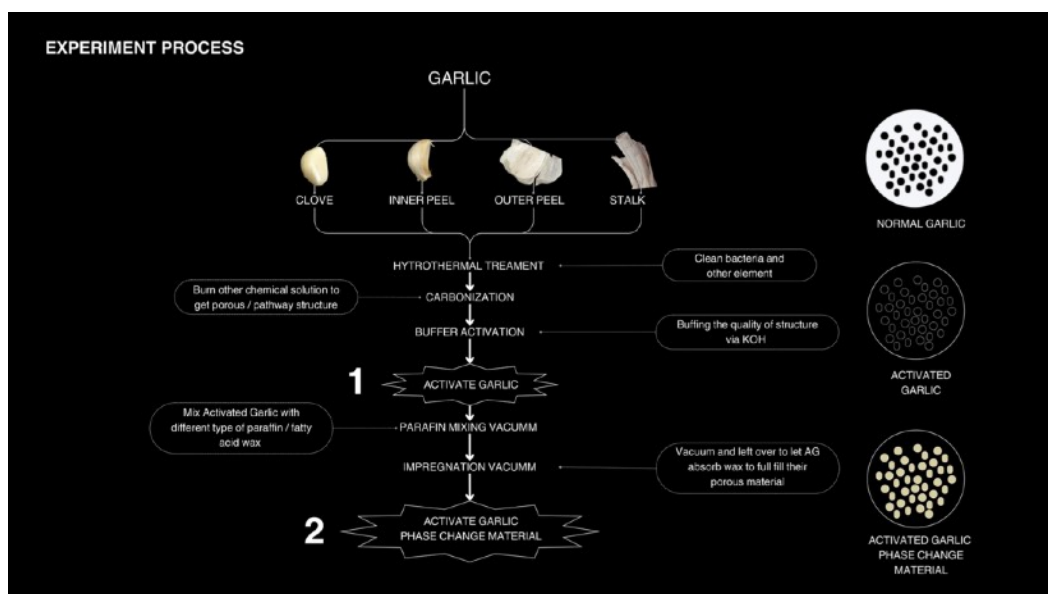
ショーを観て、私自身も自身が育ったカルチャーの研究、歴史の勉強、衣服のリサーチと実験、様々な知識と経験をしっかりこの学年で培っていき、形にできなければ来年のこのショーに出展できないと感じました。このファッションショーも限られた人しか発表できないものなので来年自身も発表できるように努力するととても良いモチベーションとなりました。とても刺激的な一日でした。

Canada Goose Project

ENDOTHERMS

ENDOTHERM, SO-CALLED **WARM-BLOODED ANIMALS**; THAT IS, THOSE THAT MAINTAIN A CONSTANT BODY TEMPERATURE INDEPENDENT OF THE ENVIRONMENT. THE ENDOTHERMS PRIMARILY INCLUDE THE BIRDS AND MAMMALS; HOWEVER, SOME FISH ARE ALSO ENDOTHERMIC.





Canada GooseとCentral Saint Martins によるコラボレーションプロジェクトでは、クリエイティブでありながら循環的、論理的で実行可能なデザインの開発と提供が求められています。

MA Material FutureとMA Fashionによるグループワークで、MA Material Futureのメンバーを中心にHumanatureというCanada Goose のコンセプトを考慮しガーリックを用いた、ダウンジャケット以外の人間の発熱機能にフォーカスしたマテリアル開発を先月から行っていました。経緯としては、内温動物は環境に左右されずに体温を一定に保つことができますが、もし人間がこの熱をヒートバンクに取り込んで蓄え、休息時に利用できるとしたらどうだろうかという問いが生まれたからです。そしてガーリックに廃熱回収、熱反復と蓄積の効果を発見できたからです。

- ・ガーリックのコーティング（刺繍、織物、表面のデザインに使用可能）
- ・スクリーンプリント
- ・ピッピング（生地への縫い目用）

この三つの技術を経て実験結果ではガーリックによる保温効果を無事確認することができました。

Canada Gooseはダウンジャケットが有名ですが、私たちは身体に密着するようなサイクリング、スキーウェアなどに使われるボディスーツの開発となる予定です。自然による力と化学が融合したカントリーなボディスーツをイメージしています。



Canada Goose Project プレゼンテーションのための会場セッティング

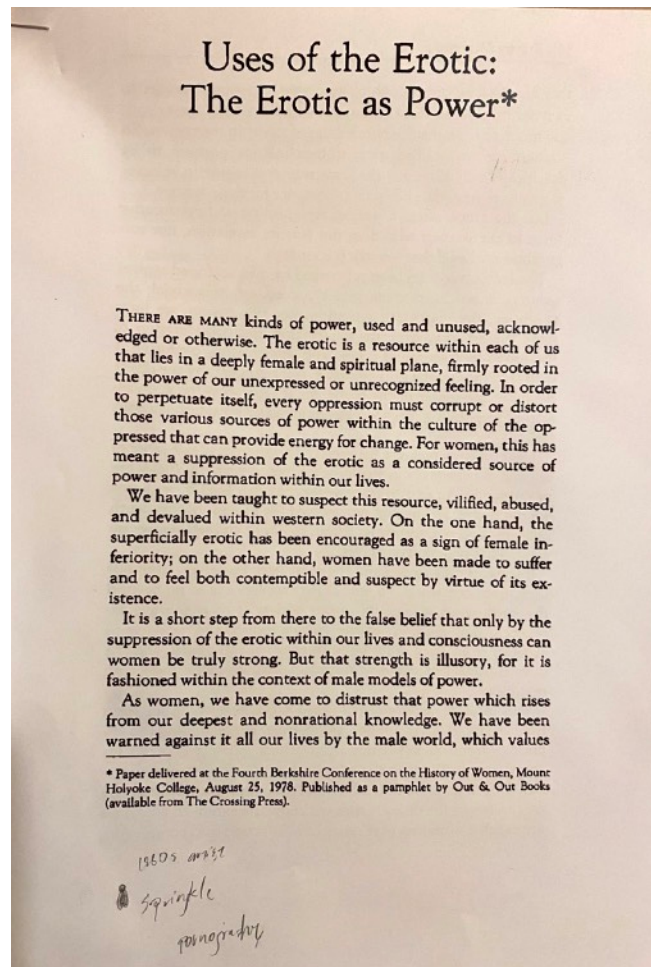
そして今月は中間プレゼンテーションがありました。

プレゼンテーションでは、Canada Goose本社の方々に対してストーリーテリングとコンセプト、その機能性と未来について発表しました。MA Material Future のメンバーを中心に行ったものですが、まずプレゼンテーションするための会場を作り上げのクオリティにとても驚きました。リスナーの方々にはパンフレットとサンプルを配布し、私たちの企画を際立てるサポートをしてくださいました。私はこのようなプレゼンテーションのやり方に大きな刺激をもらいました。そしてCanada Gooseの方々や、先生たちからはとても高い評価をしていただきました。今後は私たちMA Fashionのメンバーを中心にデザイン開発、マーケティング戦略などを考え始める予定です。彼らの研究とマテリアルの機能性が活かされるデザインをしっかりと生み出せるようにリサーチとコミュニケーションを行ってきます。



Canada Goose Project テキスタイルサンプル

ディスカッションの授業



授業のテキスト

普段の授業では、今月はエロティックという言葉について探求し、ディスカッションする授業がありました。ギリシャ語で“eros”は“カオス”から生まれた言葉のように創造的な力と調和を象徴するあらゆる側面の愛の擬人化であり、一人一人の中にある資源であり、強い感情のカオス、内的な満足感。それを理解することは私たちが自己意識することの始まりという内容でした。またエロという言葉の正反対にあるポルノグラフィは、感情を無しに感覚を強調するものとして教わりました。

ディスカッションの内容は、例えばデザイナーでは誰がエロティックで、誰がポルノグラフィかというものです。Balman やKim Jonesといった例では人間的経験の欠如や表面的なものが伺えるためポルノグラフィで、一方Vivienne Westwood はエロティックであるという話し合いにもなりました。ポルノグラフィはただ性を要素として使っているだけで、そこに強い感情と経験が含まれていないものだとこの授業では自分は理解しました。

このような内容の授業なのでディスカッションの中ではよりわかりやすい例えや経験としてマスターベーションや性のプレイについての話し合いになる時もありましたが、日本とは違ったとても開いた空気感を感じることができ新鮮な気分でした。先生も椅子に足をのつけたままラフに話しているスタイルなどにも驚きましたが、人間の根の部分である性やそのエネルギー、作品に含まれる人間の経験について考え直す興味深い内容の授業でした。

Pre-Collection Research



8月には卒業コレクションの前のプレコレクションの発表があり、それは最後のファッションショーに結びつくようなデザイン開発が求められています。さまざまなプロジェクトをかかえている状態ですが、まずはリサーチから始めている現状です。先生のアドバイスでは、テクニカル・ファイリング・システムを作るように言われました。それはとにかく自分が興味のある研究したい技術的な「モノ」でいっぱいにすることです。（襟、ネックライン、袖口、ポケット、肩の構造、裏地など服に関するあらゆること）この過程は将来の情報整理に役立つものとして強く勧められたので私は行っています。まだまだ少ないリサーチですが、集めているイメージ、過去の作品を観ても構造的なものに興味があるようなので、その機能に対する考え方やアイデンティティも共に考察し、とにかく自分が強くやっていきたいと思えるテクニックを見つけていけたらと思っています。

今月を振り返って

今月もとても忙しい日々でしたが、刺激的で毎日新たな発見がありました。改めてこの環境で学べることの喜びとグループワークを経てたくさんの優秀な友人や人々が周りにいることに幸せを感じています。来月もどんどん手を動かして日々レベルアップできるよう精進して参ります。

以上、2月分の校費留学レポートとさせていただきます。